〈選外佳作〉要旨

一林業人の見た自然保護運動

坪井　修嗣

今日さまざまな立場から自然保護が論じられているが、ここに土地に労力を投下し、人間生活に不可欠なものを作っていると秘かに自負する林業人の一人として、平素考えている自然保護運動のあり方をのべてみたい。

都市緑化のために植えられる大木は、地方の山野から大量の重油を使って運ばれている場合が多い。たとえば、南九州から東京まで十トンもあろうかという大きな楠を運ぶのに、どれ程の重油が使われるのであろうか。このように大きなエネルギーを消費しての事業では、とても緑を作ったなどと威張れる筋合のものではない。

最近焼き畑がよくヤリ玉に上げられている。原始的農法と言われる通り、長い歴史を持つものであり、そのことは取も直さず、焼き畑が実は自然に対して致命的打撃を与えなかったことの証明であり、我々が最も多く食料を依存している新大陸の近代農法よりも、反自然保護的ではないことを示している。

熱帯地方の森林の乱伐が問題となり、その保護が叫ばれている。しかし、南方材を使用しているのは先進国、わけても日本である。もし熱帯雨林に木材を求めないとすれば、日本の森林をより効率良く木材を生産できる人工林に変えなければいけないが、国内では国内で、天然の広葉樹林を守れといわれている。広葉樹は主としてパルプ材として伐られるのだが、このように主張される方々の多くは、一般の人々よりもはるかに多く、紙という形で木材を使う人々である。

割り箸反対のキャンペーンも新聞紙上でさかんに行われた。割り箸一本は約五グラム、木材から五十パーセントの歩留りで紙がつくれるとすると、新聞紙一ページで割り箸二本ができる。割り箸は木材使用量のうちわずか〇・三パーセントを占めるにすぎない。全新聞紙の広告を、年間で一ヶ月間半分におさえれば、充分間に合う量である。新聞紙の四十二パーセントを占める広告よりも、割り箸の方が国民生活において不用であると考える者は、極めて少数だと思うのだがどうだろう。

木を伐る事を悪いとする現下の風潮では、木材とアルミの建材を比較した場合、木の使用の方が反自然的だと言われるかもしれない。しかしアルミのドアは木のドアに比較して、それをつくるのに実に三十数倍もの エネルギーが使われているし、地球が長い年月かけて蓄えた財産である酸素を大量に消費されているのである。これに対し木の方は、化石燃料の大量使用によ

り増えつつある二酸化炭素を固定し、酸素を供給してきたのである。

このように考えれば、木のドアよりもアルミドアの方が環境に与える悪影響ははるかに大きいことは自明であろう。それにもかかわらず両者を同一の条件下で競争させるのが現代の経済であり、これによって林業をますます窮地に追いこみ、森林の国土保全の機能を低下させているのである。

酸素を多量に放出する森林をつくり、十分手入れをすれば表土の流出を防ぎ、ダムの埋没を延し、さらには水源の涵養によってダムの建設を不要とすることも考えられよう。そして木材として伐り、人間の生活空間に炭素を蓄え、さらに植林して新たなる酸素を放出する。このような森林の効用に対する評価はあまりにも低くすぎる。この評価を正当なレベルまで高め林業を振興することが、同時に自然環境の保全に大きく貢献するであろう。

いまわが国では食料も木材も必要量の約⅔を外国に依存している。つまり自国の生産緑地の倍の土地を国外に囲いこんでいることになる。現在世界の状況を見ると、多くの国々で森林が減少し、食料不足による死者さえ続出しているが、その責任の一部はわれわれにあるのではないか。そのような状況下で、自国の自然だけを趣味や情緒的満足のために温存することが正しいことであろうか。少くとも現在の食料や木材の低い自給率は恥しいことと思う。

いま自然を守る上で、真に問われなければならないのは、われわれ先進国の豊かさであり、ほとんどエゴともいうべき生活態度ではなかろうか。他の犠牲により自分の周囲の自然を守ったとしても、それは自然の破壊よりも、人間として醜いことである。